

2020年ドバイ国際博覧会日本館基本計画検討会（第3回）

議事録

日時：平成30年1月29日（月曜日）13時00分～14時30分

場所：経済産業省本館17階第1特別会議室

議題

- 1.開会
- 2.農林水産省より説明（農林水産省からの提案）
- 3.事務局説明（メッセージと今後の進め方（案）、基本計画案について）
- 4.討議（基本計画案について）
- 5.閉会

議事内容

1.開会

東企画調整官

それでは定刻になりましたので、只今より第3回2020年ドバイ国際博覧会日本館基本計画検討会を開催させていただきたいと思っております。委員の皆様、副幹事省の皆様、参加機関の皆様、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。本日の会議の扱いですが、前回同様、本日の会議は公開とさせていただきます。議事要旨と議事録を後日公開させていただきます。また、配布資料ですが、今回もお手元のタブレットをご覧いただくという形をお願いしたいと思います。もし不都合がございましたら、手を挙げていただきましたら事務局がうかがいます。それでは、この後の議事は座長にお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

彦坂座長

皆さん、こんにちは。昨年、第1回、第2回、活発なご意見をありがとうございました。今日は第3回ということでさっそく時間の関係もありますので議事に入らせていただきたいと思います。お手元の資料1に記載されております、最初に、副幹事省の農林水産省よりご提案をさせていただきます。それから事務局のほうから基本計画案ということで、連続して説明させていただきます。そのあと皆さんでご議論ということでよろしくお願いたします。それではまず農林水産省の鴨志田国際研究官より、農林水産省の提案のご説明をお願いいたします。

2.農林水産省より説明（農林水産省からの提案）

鴨志田国際研究官

農林水産技術会議事務局国際研究官の鴨志田と申します。本日は農水省からドバイ国際博覧会日本館の基本計画の策定に向けまして基本計画に盛り込んでいただけるとよいと考えます内容について提案させていただきます。お手元資料 2 になりますのでご覧ください。次のページをご覧くださいますと、私どもが提案したい点は二点でございます。一つ目は AI・ICT 等を活用した次世代農業技術や、生物資源の新たな産業利用につながる新技術等を紹介し、日本の技術力の高さを発信という点でございます。この点は、サブテーマであるサステナビリティにもかなうものと考えております。研究開発の成果の発表ですけれども、博覧会まで日数もございましてまた企業と連携して行っている研究もございましてどういった展示になるかということとは未知数なところもございまして、今後の研究の進捗状況や権利関係なども踏まえつつ検討してまいりたいと思っております。二点目は農林水産物・食品の輸出拡大を促進するため、日本食・食文化を紹介するという点でございます。この二点につきまして、次のスライドから具体的な展示内容のイメージについてご説明したいと思います。

まず一点目の日本の最先端の農業技術を PR し、農林水産物・農業施設の輸出拡大につながるものとして、いくつか展示の可能性のある技術のイメージについてご紹介いたします。一番上には「世界に先駆けた高温対応型の環境制御技術」ということで、今回の博覧会の会場はドバイでございますので高温の環境でも効率的な生産が可能な植物工場の技術を紹介してはどうかと考えております。現在日本の民間企業、大学、研究機関が共同で研究を行っておりまして、情報通信技術を活用して環境を遠隔制御することにより、野菜の生産に必要な環境を客観的に制御するとともに省力化を目指すものでございます。野菜生産に必要な温度や湿度、光の量を最適化することによって資材や資源の過剰な投入を避けることが可能となり、例えば、二酸化炭素の排出を削減することにもつながります。日本の技術としては植物工場内の気流を制御する技術などがございまして、現在研究中でありますので、今後の研究の進捗状況に応じて展示の内容を検討できればと考えております。

次に二番目に挙げておりますのが「世界に類のない高品質トマトの安定生産技術」ですけれどもこちらも会場がドバイだということを意識しまして、砂を使ったトマトの生産技術を紹介してはどうかと考えております。この技術は畑の土ではなくて、その代わりとして砂を使う栽培技術です。砂を使うことによってトマトが余計な水分を吸収することがなくなりましてその結果としてトマトに含まれる成分が濃縮されて、糖度の高いトマト、抗酸化作用の高いトマトを作ることが可能となります。さらに栽培技術の面ではイオンセンサーを組み合わせることにより、水分はもちろんのこと生育や味の向上に欠かせない養分の質と量の面で最適化の管理ができます。こうした資材や資源の最適化が

持続可能な農業生産にも役立つものですので今回の博覧会のテーマにも合致するものと考えております。

最後に下にございますのが「遺伝子組換えカイコによる新たなシルク・医薬品・化粧品の生産技術の開発」でございます。日本の伝統産業の一つである蚕糸業をベースに近年研究が進んでいるカイコを使った新たな技術について紹介してはどうかと考えております。例えば遺伝子組み換え技術を用いて光るシルク、蛍光シルクを作ること的成功しております。光るシルクについてはこれを材料とした光るドレスなどを作ることができまして、例えばアラブの女性が着用するヒジャブを光るシルクで作って紹介することもアイデアの一つとして考えられます。また細いシルクと書いてございますけれども、細いシルクで作った織物は、肌触りがより滑らかで染色もしやすいことからより光沢感のあるものを作ることができます。またカイコが作るシルクはタンパク質でできており、カイコはタンパク質を非常に効率的に生産することができます。この能力を利用しまして、医薬品や化粧品などに有用なタンパク質を生産し、製品開発につなげるということも期待されております。

続きまして最後のページに参りますが、日本食・食文化を紹介し、農林水産物・食品の輸出拡大につなげるというものでございます。具体的には日本産の食材を使ったラーメン、カレー、すき焼きなど外国人に人気のある日本食を提供するフードコートを設置する、また外国人に知られていないカジュアルフードも合わせて情報を発信するということが考えられます。また、最先端のバーチャルリアリティの技術などを活用しまして、おもてなしあるいは日本食の調理を体験してもらい、体験型の要素を含んだ情報発信を行うことも考えられると思います。

来場される一般の方々的印象に残るような展示を工夫していくことが必要だと考えておまして、全体のテーマ、サブテーマ、およびこの検討会で策定される基本計画を踏まえながら具体的な展示方法などを検討していきたいと考えております。以上でございます。

彦坂座長

どうもありがとうございました。委員の方から何かご質問があるでしょうか。特になければ、資料3の基本計画について事務局の方よりご説明いただきます。よろしく願います。

3.事務局説明（メッセージと今後の進め方（案）、基本計画案について）

東企画調整官

ありがとうございます。資料の3-1と3-2がございまして、3-1の方は前回いただ

いたメッセージの議論の続きの部分と今後の進め方という部分でございまして、3-2はそれも含めた基本計画案ということで、配布させていただいています。基本的には3-1に基づいて説明したいと思います。前半は日本館が発信すべきメッセージということで、ページをめくっていただきますと、ページ右下の番号2で、メッセージの前に出展にあたって目指すところを整理させていただいています。中東をはじめとする国際社会における日本のプレゼンスの向上、産業の振興、インバウンドの増加、過去博の理念の継承と2025年博覧会 の機運醸成を含めたレガシーと、次世代の人材の活躍とさせていただきます。

それから一枚めくっていただいて3ページ、検討の視点というところですが、これも前回も議論いただいたところを踏まえていますが、大きく五つ書かせていただきます。**Connect**という言葉キーワードにする、日本らしさ、日本ならではの視点は必ず必要だというご指摘もいただいたと考えております。それから技術の展示をするにあたって必ず人を中心に考える、分かりやすいシンプルなメッセージにする、よく分からない言葉にしない、2025年博へのつながりも意識して検討するという五つの視点を書かせていただいております。

一枚進みまして4ページ目ですが、メッセージ案を書かせていただいております。前回、「調和と革新」という言葉でしたり、前回お示した案の中でそれぞれもう少し頑張ってくれというご指摘があったと思っております、それを踏まえてこのような案にさせていただきます。青枠のところですが **Connect** をキーワードに日本独自の素材を使って国際社会に日本の可能性を発信していくのだということで、こういう三つの切り口でつながる、**Connect** という言葉を表現してはどうかということで書かせていただいております。時間を超えて、空間を超えて、国境を超えて。一番目でございまして、日本の歴史の長さ、特に古い文化、伝統があるというご指摘もございまして、そういったものもありながら新しいものに挑戦していくという日本のチャレンジ精神と言いますか、そういった精神をしっかり示していくということが大事ではないか。抽象的ですが、例としては、日本の伝統文化と日本の最新技術を掛け合わせたもので新しいコンテンツを示していくということができないか。

二点目ですが、物理的な距離や分野の垣根を越えて色々なものがつながる社会という中で、日本が世界の課題解決にしていけるかということを示していけないか。具体的には、通信技術やAIを活かした新たな課題解決の姿を示すことができないか。

三点目ですが、国境を超えてということで、「調和の精神」ということもございましたが、日本が古くから培ってきた自分達とは異なるものに対する寛容さ、上手に吸収して独自のものに昇華させてきた柔軟さを示していくということで、例えばですが、先ほど農水省さんからも地域のニーズとポテンシャルを踏まえた技術のご紹介がありました。そういったものも含めて、海外と上手く新しいものを作っていける日本を示していくということを考えてはどうか。

いずれにしても、本物の、日本を感じていただけるような工夫をしていくということが必要だというご指摘も色々いただいたと思っておりますので、下に書いてありますが、実物を実際に持っていくことであるとか、疑似的に日本を体感できるもの、日本の精神性、心に触れられる体験を提供するという形で実際の展示の工夫をしていってはどうかということでごここに書かせていただいております。

次に、もう一枚進めまして今後の進め方についてです。右下 6 ページに行きまして、この検討会は、元々基本計画を策定していただくための、そこがミッションになるわけですが、実際にはそこからこの基本計画策定後も具体化していく作業や、色々やっていけないといけないことがございますので、ここで検討会後のことについてご議論いただきたいと思っております。大きく五つ書いていまして、一点目、主なスケジュールとして、ざっくり申し上げますと、平成 30 年度に建築、計画を作るとか設計を作るというのを基本的には行い、平成 31 年度、来年の 4 月以降、建築や展示の実際のものを作っていく、という作業に入っていく必要がある。再来年度のしかるべきタイミングまでには各種施工や実際に物を作り終えるというスケジュールを想定しております。

二番目に推進体制と書いてありまして、これは別のページで説明させていただきます。三番目も色々ご議論いただきましたが、次世代のクリエイターの活用になるように考えていく必要があるというご指摘がございましたので書かせていただいております。これも二枚後ろのスライドでご説明します。

四番目でこういう形で意見をいただきながら実際これから具体化していくわけですが、なるべく広く知恵を集めるような仕組みを考えてはどうかということで、例えばですが、ドバイに住んでいる人を対象にアイデアソンを実施する、そこにでてきたアイデアを展示につなげていくとか、あるいは日本館の準備がある程度進んだところで、現地の方をモニターとして実際に日本館を体験していただいて、それを運営や展示の最終的な調整に反映していくといったことができないかということを考えております。

最後に、本検討委員会の委員の役割と書いてございますが、先ほど申し上げましたように、この先、ここで計画がまとまれば委員会自体のミッションは終わりということになるのですが、引き続き色々な形でご助言、ご協力をいただきたい、是非そうしていただけないかということを書かせていただいております。

一枚めくっていただきまして先ほどの体制のところでございます。基本的には経済産業省が幹事省で、副幹事省が 4 省ございまして、経済産業省から委託で JETRO が参加機関になっておりまして、JETRO から総合プロデューサーに委託する形で事業を進めていくわけですが、ご議論の中でもありましたように、JETRO に専門的な知識を有するクリエイティブ・アドバイザーチーム（仮）と書いていますが、こういうチームを置いてはどうだという意見がございまして、そこを書かせていただいております。具体的には実務レベルで打ち合わせにご参加いただく形で、展示の具体化ですとか人材発掘を専門的な見地から JETRO あるいは METI のサポートをしていただくということをご

定しております。

それから最後ですが、8 ページですが、若手人材の活躍、これも必ず若手の成長の場になるようにしないといけないというご意見をたくさんいただきまして、それを踏まえて書かせていただいています。二つ目のポツですが、仕様とか応募要件を工夫して入札を行い、そういう次世代を担う人材の活躍を推進するということを検討してはどうかというものです。下に参考にご書いてございますが、過去の例をいくつか探してみたところ、例えば 2010 年の上海博では日本館のロゴマークの選定にあたりまして、JETRO が若手デザイナーを指名した形でコンペを行うということをやっております、具体的には日本グラフィックデザイナー協会の新人賞受賞者を対象にお声がけをして、そこから応募があったものの中から実際に日本館のロゴマークを選ぶということをやっております。これに限る必要はないと思っておりますが、例えばこういったスキームを参考にしながら若手の方にご参加いただく機会を作ることができるのではないかと考えております、それを書かせていただいております。

この資料につきましては以上です。資料 3-2 のほうでございますが、こちらが先ほど申し上げた全文になっておりまして、大きく 4 章立てになっております。第 1 章で博覧会の概要、第 2 章で先ほどご説明した日本館のメッセージというところと第 3 章は第 2 回に JETRO からご説明いただきご議論いただいた日本館の細かい分野別の進め方、やり方、具体的には展示、建築、運営、行催事、レストランなどの商業スペースなど、それぞれについてこういうことに注意して進めるべしと書かせていただいております。それから最後、第 4 章のところでは先ほどご紹介させていただきました今後の進め方を書かせていただいております。全部で 4 章のつくりとなっております。ちょっと全部読み上げるわけにはいきませんので個々の説明は割愛させていただきますが、最終的にはこちらについてご意見があれば反映させていただく形で基本計画を取りまとめていきたいと考えております。長くなりましたが、以上です。

4. 討議（基本計画案について）

彦坂座長

ありがとうございました。今の東企画調整官のお話、基本計画本体にかかわることですのでご質問も含めて自由討議に入りたいと思います。まず、どなたかぜひ、私から発言したいという方がいらっしゃるか。

澤田委員

基本計画としてはよくまとまっていると思います。今後、実施計画に向かうべき与件が全て示されていると思います。テーマだけを決めて、その後にそれに似合うパーツを決

めるのではなくて、それらを同時に調整しながら作成し効果の高いものを作ったらどうかという話をさせていただいてきましたが、そういう意味で考えるべきポイントは全て網羅されていると思いますので、私としては非常にまとまりのいい基本計画ではないかと思います。

彦坂座長

はい、ありがとうございます。特に付け加えることはございますか。

澤田委員

特に付け加えるということはないのですけれども、先ほどこの検討会が終わった後も継続的というお話がございましたので、今後は具体案を検討する段階で、皆さんが一つの思いを共有していくことがその検討の基礎です。その点で共有すべきポイントがここに整理されており、プラットフォームとしての計画書としては非常によく機能していると思いますので、特に付け加えることはこの段階ではありません。

彦坂座長

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

吉川委員

澤田さんと同意見で、よくまとめていただいたと思います。細かい点で色々ご意見もあると思いますが、一つ重要なことは、ドバイ万博に向けた内外でのPRということです。まだ日本の中で、ドバイで万博をやるということすら知らない方がほとんどだと思います。これから2020年に向けてオリパラ情報であふれていく中で、並行して同時進行でやっていかないといけないという厳しい状況におかれるわけです。ドバイ万博をきっかけに開催地域に日本人をどうConnectしていくかという発信を、色々なレベルでやらないといけないと思います。それに向けたリテラシーの醸成を官民一緒にやっていかないといけないのではないかという問題意識です。世の中の盛り上がりは、オリパラでピークになるわけなので、オリパラ終了後間を置かずドバイ万博を盛り上げるのもむずかしいので、ある意味では地道に且つ長期戦で色々なところで、今まであまりエクスポージャーのないドバイという地域とそこに住む多国籍の人々にスポットを当てて、日本人の潜在的来場者の方々のリテラシーをあげていくという努力が必要ではないかと思います。

彦坂座長

はい、どうもありがとうございます。オリンピックが終わって腑抜けな状態になってしまっているのは非常に問題がある。たまたま総合プロデュースチームが広報事業の受

託をやっておりますので、ぜひ近い委員の方はこういう風に日本館をやってくれというご指導をよろしくお願いします。他、いかがでしょうか。

キャンベル委員

私もよくまとめられたというふうに思います。これからたぶん、プロデューサー、実際に全体のソフトとハードの設計をされる方にバトンタッチされていくと思いますので基本計画、骨格としてはよくできていると思います。一、二点、もう少し強調してもよいかないところがありまして、全体として読ませていただいていて四点、提言の中で、肝になるところがあるという風に思っています。それを少し指摘しながら、最後に少し強調していただきたいところを申し上げたいと思います。

一つは見せるものから体験し共有できるものへということが示されていて、これはとても重要なことだと思います。最初に、アイデアソンを現地の人と一緒にやるとか、フォーカスグループをやって設計がある程度固まったところでこれは何がいけるのかいけないのか、つまり体験をする、共有するというを受け止める側がそれだけの準備があるのか、前回吉川委員から馬と鷹が非常にこの地域の方々にシンボルとして強いということもあるので我々が想像のつかないようなまとめかた、あるいはズレということが生じると思いますのでそれを肉付けするためにぜひフォーカスビューなどを早めに実施していただきたいと思います。もう一つは一過性の、イベントから未来に残り、フォームにもなる、活用できるものへという転換が問われているわけですが、これもその通りのこととして別のところで若手の参入、若手のデザイナーの提案をフルに投入ということが含まれていると思いますがこれが一番、本当のプラットフォーム、レガシーというよりも生きた活用できるそこから色々なものが創出されるために、そのところが重要だと思いますのでそこは十分に設定を構築していただきたいと思います。

三つ目ですが、日本独自のコンテンツというのは、漫画もアニメもそうですが歴史文化に根付いたものが多いと思います。ここではそういう伝統的な文化、日本独自のコンテンツを最先端の技術と対比させるということではなく、ここにも書かれていますけれども昇華させるような形で新しいものを能動的に、積極的に素材やあるいはテーマと絡ませて掛け合わせることで新しいものを作ることが重要かなと思います。つまり伝統的な日本と、近未来的な日本という二項対立が世界の中であると思いますがそろそろそれを崩していただきたいというか、そこがよい場所ではないかと思います。最後ですけれども、先週課題大国日本の話もしてしましてその言葉が今回から今盛り込まれていなくてそれは結構だと思いますけれども、しかし、ありのままの日本という文言があるわけですがそれでもその中に、日本が抱える課題をネガティブなマイナスなもの、陰のほうではなくて課題解決型の日本の社会の姿勢ということをぜひ示していく、これもまた、千載一遇のチャンスだという風に思いますのでその日本社会が抱えている良いことももちろんあるのですが、高齢化や医療の問題、社会保障、気候変動、様々な取り組みが理解

できるようにそしてそれを体験が共有できるような形を一層具体的にできれば少し盛り込んでいただければいいと思いました。

彦坂座長

はい、貴重なご意見ありがとうございます。盛り込むようにいたします。伝統と近未来という二項対立は日本だけではなくて色々な国がそういう感じになっているから日本が率先してそれをブレークスルーできるといいですね。ぜひ、衆知を集めてやれればと思います。他に。

江村委員

今のキャンベルさんの話に近いのですが、まず必要なことは全部盛り込まれていると思っています。ともすると博覧会に意識が行きがちだと思いますが、この機会をどう生かしていくかという観点で議論させていただければと思います。一つは今言った、これから世の中はずいぶん変わってきているので将来を描くという場に、つまりこの機会、衆知を集めるというのがありました。まだ時間があるのでそういう場を上手く作っていくことができると思っています。そう思ったときに若手の方をというお話がありましたが、その時にやはりダイバーシティを考えたほうがいいかなと思っていて、デザインとか展示とかというのにいつも皆さんの意識が行っているのですが、テクノロジーのこともあるしもう少し社会学とか宗教とか言う意味でそういう人達を集めて少し先の社会を描いてみるというのが少しマインドという意味で重要ではないかと思えます。最初から展示ばかり意識するよりは、マインドをどう使うかというところを工夫すると価値が上がるのではないかということと、それからもう一点、私は産業界から来ていることもあり、出展を目指すのに産業の振興を抱えていて非常に重要なのですがなかなかそこに議論があまり行っていない感じがします。ただ今日農水省さんから話がありましたので、そういったあたりが、展示ではない部分で、これからの活動にできるというのは思ったりします。

彦坂座長

ありがとうございます。おっしゃる通り、前からまず社会像はこうだというところは非常に重要だとおっしゃられているから是非そこはやりたいと思っております。齋藤委員。

齋藤委員

みなさんと同じなのですが、前回我々のクリエイティブはどうあるべきかというチーム論と体制等のところのお話をさせていただいて若手をできるだけ起用というのをこの中に盛り込んでいただいて素晴らしいと思います。皆さんがおっしゃっている通り、

万博は 2025 年の招致もされていると思いますが、万博を機にできるだけ違う産業の方々が結びついたり、もしくはそこで新しい何か発見があったり、先ほどの農水省の方からのプレゼンもそうですが、ああいうものを見て、もしかしたら他業界の人が何か反応することがたくさんあると思うので、江村委員がおっしゃる通りできるだけ時間を使ってそのプロセスをどうデザインしていくかが非常に重要になってくるかなと。クリエイティブのところの若手起用はもちろんあると思いますが、新しい開発をしている方もいらっしゃいますし、もしくは企業の中でも新しい開発なりサービスなりを展開されている方も、これは若手に限らずいると思います。こういうのをどんどん発見していくところをしっかりとやっていくと、単純に一展示ではなくて、その展示が展示の前のプロセスも合わせてすごく意味のあるものになるのではないかと考えています。

あとは、先ほど吉川委員のほうからもありました通り、日本国としてやっている万博のようなイベントが、他国で開催されるとどうしても日本人の方がそれをあまり知る機会がないというか、広報はもちろんやられていると思いますが、同じ意見でできるだけ 2025 年はどうなのかというのはまたありますが、日本人の方にも万博を何かしらのきっかけで知ってもらおうというか、先ほど言ったプロセスも含めて知る機会はこちらにアイデアソンをして参画の仕組みがありますが、そういうのに参加できる形もできるだけ広げていくといいと思いました。いろいろ言いましたが全体の中身に関しては非常にいいと思っており、2020 年の万博までに作っていきなるといいと思います。ありがとうございます。

彦坂座長

ありがとうございます。本当は展示とか建築とか広報とかと同じようにプロセスを構築する、戦略的に色々なものをつなげるというタスク分野があるくらいのほうが本当はいいですね。今までのことがあるからなかなか行かないのですが、ぜひできるような機会になるといいですね。それは思います。はい、橋爪委員。

橋爪委員

五点ほど申し上げたいと思います。一点目は、検討の視点の一つ目で過去博の提言を最大限に生かすと書いてあるのに加えて、改善すべき点は改善するというのがイメージされている。この文案をどうするかという意見ではなく、我々はどこを改善し、従来の博覧会と今回は何が違うのかという点はきちんと共有すべきだろう。例えば、VIP ルームなどの扱いという点では、従来とは異なる考え方を今回はすべきだということを述べた点は、強く意識すべきだと思います。あとアテンダントからキャストへ進化という考え方も、従前にはない発想ではなかろうかと思います。博覧会の歴史をさかのぼれば、明治のころは今のアテンダントのことを、概念がないので女看守と称した。観客が悪いことをしたら見張るということもあって看守という言葉が用いられた。大阪万博の時は

ホステス、その後、コンパニオン、アテンダント、キャストというように来場者と交流する、もてなす役割の概念は変わってきています。今回のキャストという呼称はテーマパーク由来の気もいたしますが、新しい日本独特のキャストという概念を示していきたい。今回の構想のどこが新しい試みなのかという点を、我々は意識すべきだということを申し上げたいと思う。

二点目としては、季節感をうまく生かしたい。冬の博覧会で、期間内に正月を越す。年度をまたぎ、春まで続く博覧会である。初回の会議では桜を満開にせよということをお願いしたが、日本の四季、特に冬場から春の素晴らしさを上手く会場に展開できればと思う。

三点目といたしましては、日本の独自性とグローバルな考えかた、固有性と世界標準的なものとの関係をどう捉えるかが重要だという点。我々は世界中にある様々なコンテンツを、日本化して付加価値をつけてきた。それが日本の魅力であるということを私は強調すべきだと思う。先ほどの農水省提案の事例でいえば、例えばトマトなどがある。アンデス原産で、世界中で品種改良がなされて広まったということは自明である。要は、トマトというグローバルなコンテンツであることを前提に、我々は独自の技術によって、他にはない価値を付加しつつある、ということなのだという点を意識すべき。シルクも中国発祥だと言われているが、世界中に広がるなかで、日本がどのような付加価値をつけたかをきちんと主張すべきだと思います。背景に世界的なコンテンツとか普遍的な消費の広がりがあることを自覚したうえで、日本のたちの主張すべき点をきちんと訴えることが重要であろうと思います。

四点目としては、主催者サイドとの連携をきちんとはかるべき。今回、追加で記載をお願いするというのではなく、その種の意識を共有していただければと思います。たとえば待ち時間をなくすという発想は、日本館だけではない可能性がある。各館で、待ち時間等への対応などが入ると思います。それは日本館だけではなくて、会場運営全体の中で考えていくべき課題かも知れない。逆に日本の技術をドバイ側、運営主体側に提案することもあってはいいのではと思う。日本館で日本の技術を宣伝することだけではなくて、今回の博覧会の会場全体に広がるような日本の技術を示すということも重要。要は、テーマ館や各国の展示、あるいは会場内の移動手段などが、様々な各国の中に日本の技術が採用されていることをアピールできないものか。待ち時間を無くするというテクノロジーの提案などは可能性があるように思います。

五点目として、レストランや商業も、展示の本体部分と連携をぜひともしていただきたい。従前はレストラン事業者を公募などで選ぶがゆえに、もてなしの在り方などのクオリティに違いがあった。たとえば、展示のほうはキャストという概念を導入するのであれば、レストランの接客の在り方も同等であるべき。展示部分とレストラン部分の親和性というか、トータルとして来場者への接遇を考えないといけない。博覧会では、展示が終わっていったん館外へ出ると、ガラッと雰囲気も変わることがある。飲食は、外部

から、展示を見なくてもアプローチできるようなところにあるのが通例だから、まったく別で良いという意見もあると思いますが、そうだとでも私はクオリティの水準を保っていただきたい。レストランの事業者公募の考え方の中に、展示との連携や考え方の共有といった視点があるといいと思います。以上です。

彦坂座長

端的かつ具体的なご意見ありがとうございました。何らかの形で基本計画に盛り込みたいと、ぜひやります。

内田委員

みなさんと被る部分もあると思うのですが、基本的に計画自体は皆さんと意見が一緒でよく盛り込まれていると思います。まず、確認なのですが、東さんが説明された資料で、空間を超えてつながるといふ、日本が発信すべきメッセージのところ、基本計画のほうだけを読むとわりにすんなり読めるのですが、パワーポイントの資料だと例として通信技術とか人工知能ということが書かれています。

この資料がどう残るのかということもあると思いますが、技術の提示の仕方は、こんな新しい技術がありますというものと、課題があつてその解決にこういう技術が使えますという、二つの方向性があります、理想的なのは、技術のプレゼンテーションではなくて課題の共有と技術的な解決かと思います。

課題自体は、解決することが未来へ向かうことそのものなので、ポジティブな意味でとらえ、その上で課題の共有と技術のかかわり方が見えるのがよいと思います。また、技術の選定において、日本の独自の技術、イノベーションがなんなのかが結構大事なポイントだと思います。通信技術は結構日本が先を行っているけれども例えば人工知能、AIという話になったら日本だけがすごく先端を行っているわけではない。でするので、例えばそういう技術を選定すると、色々な万博にありがちな皆同じ分野の技術で何となくこういう未来はこうではないかという、似通ったプレゼンテーションになってしまう可能性があると思います。また、人工知能という言葉自体が、2020年の時にどういうニュアンスを持っているのか、(新しくないかもしれないということなのですが)、みたいなことがあるので、例として今出すことは気になりました。まとめますと、基本計画の日本のイノベーションという部分を、日本「独自」のという言葉を入れていただけるといいのではないかなと思います。

それに関連してなのですが、例えば農水省さんの提案は、まさに日本独自の技術ですが、これも技術としてとらえるのではなく、万博全体の日本の文化とか伝統というものとどう融合させるのかということが非常に大事で、例えば農業の技術に関しては絶対的に日本の風土や自然観がからんできます。技術はグローバルなものではなくてその土地の文化から生まれてくるものなので、文化と技術の連動というか物語の描き方と

というのは、万博全体の中では非常に重要なのではという風に思います。

農水省さんの提案の中では、フードコートという言葉があったのですが、フードコートというと、おなかを満たすためにパパッと食べる場所という印象があります。ところが、日本人が食というアクティビティを通してどういうことを育んだのかという背景をちゃんと文化背景を融合させることで、例えば演出や、設計にもかかわるかもしれませんが祭りや屋台みたいなもの、あるいは伝統的なお祭りの直会や、ファーストフードでいうと江戸文化といったようなものをつなぐことができます。

スタートは、そういうことと上手く連携させて設計することが大事です。設計時に後から技術の提案があって、では、これを入れましょうという風になってくると、だんだん若干ちぐはぐになる懸念があります。技術やイノベーションというものと、文化そして、課題共有ということがうまく融合させることが、腕の見せ所というか万博パビリオン制作の腕の見せ所になるのではと思います。

あとは皆さんがおっしゃったことから発想してプラスで気づいたことがあるのですが江村委員の「若手の投入だけではなくダイバーシティ」について。」前々回くらいに私も若手は一体誰なのかという話をしましたが、みなさん、展示の設計ということだと、なんとなく、30代、40代という、大人をメインに考えていると思います。ただ社会をどう描くかとかいう話まで広げた時に、子供といわれる人たちもターゲットではないかと思いました。例えば今だと中学生で起業する子たちもいます。例えばすごく人気のユーチューバーがいるとか、インスタグラムのインフルエンサーがいて、社会づくりに参画するプレイヤーが若くなり、非常に活躍する時代になってきているのではと思ったのです。ですから、この若手の概念を限りなく広げられたらいいのではないかと思う。後は広報の話ですが、齋藤委員が「日本の人がどう万博を知るか」という話をお話されましたが、例えばVRとかARみたいな技術でのパビリオンコンテンツがあるようでしたら、それらは、基本的にどこでも再現できるので、もし権利的なものが許すのであればドバイで展開しているコンテンツを、一部東京の渋谷で見られますとかそういう連携がイノベティブにあってもいいのかと思いました。

あともう一つ最後に、これは橋爪委員が最初におっしゃったことでもあるのですが、前回のフィードバックについてです。こういう有識者会議は毎回やっていると思います。毎回そのたびに非常に理想的な基本計画というのはできており、その理想が、企画、設計、施工と、具体化していく中でだんだんちょっとずつ抜けてきてしまったり変わってきてしまったり色々な事情で諦めざるを得なかったりということになってくると思います。これから先なのですが、例えば前回のことを知っている方たちにもう一回考えていただきたいのは、設計製作の中で何がボトルネックで計画とずれたものになったか、もし分かるのであればそこをちゃんと分析して今後の設計のプロセスで回避してもらえたらと思います。計画自体はいいのですがやはり計画はまだ何も、実務が動いていないので理想を掲げられます。前回も前々回も間違いなく基本計画自体は素晴らしくてそ

の時代時代においての最高の物を作っている。しかし、なぜ結果としてちょっと足りなかったのか、そこを今後の進め方の中でぜひ気を付けておいていただきたいと。すみません、以上です。

彦坂座長

ありがとうございました。分析は大事ですよ。それと、今回は委員の皆様にごこれで終わりという感じではなくてずっと見ていただいたりご助言いただいたり、先ほど東企画調整官から JETRO サイドにクリエイティブ・アドバイザーチームを置くとかプロセス管理をすとか、全力でかからないと、と思います。渋谷の件は大変面白いと思います。2019 年に東急が完成しますから、そのお披露目に合わせてちょっとやるとか色々なこともできると思います。それとテクノロジーそのものを見せるのではなくて背景に課題があるというような、誤解されないような書き方にするにはいたします。

東企画調整官

ありがとうございます。基本にご指摘の点は理解しているつもりで、おっしゃる通り単純な技術の展示にならないよう、そこに課題解決とか、先ほど社会という話がありましたが、どういう要素を入れるかを考えていかないといけないと思っています。ご指摘の個所につきましては、ここだけ本文と今日の資料とがずれている箇所として、基本計画案には特段展示の例示は書いてございません。個別具体的に例を書けばより具体的なイメージも湧くし、澤田委員からもご指摘がありましたが、具体的なものが見えないと、なかなか議論が深まらないという面もあって悩んだところでしたが、今回の議論のスコープとして、そこまで決めるあるいは具体的に書くというのは非常に難しかったので、基本計画案には特段書いてはございません。他方で、一切イメージを、何の話をされているかが共有されていないと後になって全然違うということになっても困りますので、今日のプレゼンテーションの方には例えばということで書かせていただいております。これをもって決まりだということは当然ございませんし、そういう位置づけで考えております。こういうことも基本計画に書いた方がいいというご指摘があれば書きますし、書かない方がいいということであれば今のままで考えています。以上です。

彦坂座長

他に、どうぞ。

吉川委員

議論の本質とは関係ないのですが、外務省はドバイ万博にどう絡んでいますか。

東企画調整官

今回参加するにあたっては、日本がドバイ博に参加しますということを閣議了解で決めたわけですが、その段階では、副幹事省は今ご出席いただいている4省ということでご協力いただくという体制になっています。他方で、実際に現地に行くときには当然大使館、領事館を中心に大変ご協力いただいていますし、実際に会期が近づいてくれば、よりそういう外交ルートを通じてやらせていただこうと思っていますので、実際にお手伝いいただく部分はたくさん出てくるのではと思っています。

吉川委員

議論の本質とは関係ないのですが、外務省はドバイ万博にどう絡んでいますか。

彦坂座長

ありがとうございました。他に特にこれだけは言いたいというのはございますか。

澤田委員

基本計画に反映してほしいということではなく、今後の検討の参考にしていただきたいことですが、地下鉄を日本が作ったのだが現地の人には知らないというお話をお伺いしました。そういうところから説き起こすというのは、現地の人にとっても非常に分かりやすいのではないかと思います。地下鉄を入り口にして日本を紹介する。現地で親しまれているものから始めるほうが分かりやすいのではと思います。私がサラゴサ博で、浮世絵コレクションがサラゴサ美術館にいっぱいあったので、そこから入っていくようにしたのですが、現地の人には親しみやすく分かりやすかったと思います。なかなか馴染みのない地域は日本について共感しづらいところがあるので、自分達と近いところで接点があると日本に対する親近感がグッとくるので、そこは非常に重要なのではと思いました。

それから中東ということもありますが、インドの方がすごく多いということを考えると、UAEの人でも大事だけれども、今の国際情勢からはインドの人に日本をプレゼンすることは重要な視点のような気がします。そこは今後、意識してはと思います。インドに向けて特に何かをするということではないのですが、中東、中東というだけではなくてそこに色々な国の人が集まるので、そういう人達に対するプレゼンテーションというの意識されたらどうかと思います。

それから広報ですが、私は皆さんの意見と逆にやはり国内も大事ですが、その地域でどう広報できるかが非常に重要だと思います。ミラノ万博では、中国が街の中でも色々やっていたら良かったです。もしかすると、誤解かもしれませんが日本は街には全く出ていませんでした。各地で日本館という限られた所だけでなく、せつかくの機会だからより日本館に来てほしいもしくは日本を理解する機会として色々な広報を行ったら良い

のではない。確かに日本人にも知ってほしいですが、予算の問題があってどちらかという選択でいうと私はどちらかという国内でお金をかけるのであれば海外でお金をかけて、せっかくそこで出会える場所があるので、それを価値化するという意味で海外の広報に腐心されたらと思います。

それからミラノ万博で思ったのは、事務局に行ってみるとイタリア人だけでなく、会場計画の建築家はスイス人、ガイドブックの編集者はオランダ人のチームでした。EUの統合が進んでいるということかもしれませんが、多様性がすごいと感じました。日本人は何だという問いはおそらく突き詰めると難しい問題になりますが、日本は調和の国だといったときに、世界を調和していくという意味でいうと本当に日本ということだけにとどまっていいのかという議論はあるような気がします。すべてそれではいけないのですがやはり、コーディネートしてつないでいく存在、そういう日本ということをどこかで感じられるような展示なり構成というのがあってもいいのではないかと思います。

最後ですがこれだけインターネットが進んでいる時代なので新しい技術や新しい課題はあっという間に古くなって、万博は1年以上前に内容が決まるので、できた時にはだいたいみんな知っているということになってしまいます。それに対応するために、できれば実験をやってほしいです。先ほど植物工場の話がありましたが「ここで実験してみよう」はその時の最先端なのでそういうものを展示にする。そこでもしかしたら上手いかもしれないかもしれませんがそういう実験する、それが最先端の技術であり展示だとするときと話題性もあるし、パビリオンは単に見せるものではなくて生きたものとして出来上がってくるのではと思いました。今後、ご参考にしていただければと思います。

彦坂座長

はい、大変ありがとうございました。ぜひ実験はやりたいところです。

橋爪委員

二点ほど。日本と現地とをつなぐうえで、導入をどう示すのかが重要だろう。その際、私は、世界中で知られているが、意外とこれは日本製、メイドインジャパンというかクリエイトオブジャパンとは知られていない何かを示すというのが、今回の万博に限らず必要である。例えばカラオケというのは、我々は日本人の大発明だと言っていますが、世界に出た時にカラオケは世界標準語であるにもかかわらずあれが、日本人の大発明だということは十分にはアピールされていない。カラオケは一例ですが、我々の常識での判断ではなくて、海外から見てこれは世界的に日本が影響を及ぼしたものだという発想や技術を、私は導入のところで改めて強く示すべきではないかと思う。

もう一点は、来場者に対して、小さなスーベニールでもいいのですが、何らか持って帰っていただけるものがあればなど。ミラノの時はスマホに色々なデータを、料理のレシピとかを持ち帰りました。それを皆さん家庭で使ったかどうかわからないが、何かを持ち

帰ることができるのは、一般の方は嬉しい。最近コンサートに行くと QR コードの書いているカードがもらえて、あとでライブ映像を特別に見られるというサービスもあると聞きます。お金をかけた土産物ではなくて、アイデアを出していただいて日本館に来るとこんな経験をし、その思い出を持ち帰ることができるという趣向は、工夫のしどころではないかという風に思います。

最後もう一点だけ付け加えておきたい。ドバイで日本のイメージを広める時に、例えば祭りに関する色々なコンテンツなどを現地で展開すると良いかも知れませんが、麗水の万博では、ジャパNDERの時であったと思います。唐津くんちが会場内を練り歩いた様子を見て驚きました。巨大な何か、山鉾など、非常に強いものを見せないといけないのではないか。ドバイは全体がテーマパーク以上にきらびやかでスケールアウトした都市。圧倒的なものが日常的に街の中にある中での博覧会なので、非日常性の強度を高めないとなかなか強く訴えることにはならない。伝統的な祭りを展開するという方法もありますし、新しい祭りをそこで創造するというのもあっていいと思いますが、とにかくスケールアウトをすとか、強い感動を与えとかにしないと情報も最新技術もあふれかえっている都市での万博なので、そこは強い演出をしたいと思います。以上です。

彦坂座長

貴重なお話ありがとうございました。

齋藤委員

齋藤です。一つだけ言いたいのが、さっきどなたかがご指摘して思ったのですが、モノを作っている人間として難しいところですが、(実施の1年以上前にプランを)策定しても、最終的な完成までに時代がこれだけ動いてしまうと、どんどん変えていかないといけないところがあって、コンテンツの中身とか導線とか最終的には書き方とか名称とか分かりませんが、そういうところを少し、(難しいのは分かりませんが)自由度を持たせた作り方は構造的にできないかなと。前回私たちも制作で関わらせていただいたミラノの時も、こういう言い方をしたほうがいいのではというのが簡単には変わらないところがあるので、そこを時代に沿って変えられるような形になるといいと思いました。

5.閉会

彦坂座長

なにか上手い形で反映させたいと思います。皆様のおかげで、事務局のご尽力もありまして素晴らしい基本計画になりそうな気がします。今日ご発言していただいた皆様の貴重なご意見、必ず反映するようにいたします。農水省さんからプレゼンがありましたが

副幹事省さんから何か特に言いたいことはございますか。よろしいですか。ありがとうございます。そうしましたら、参加機関である JETRO の野口理事。

野口理事

座ったままで失礼します。座長、各委員の皆様闊達なご意見を交わしていただきありがとうございます。早急に推進体制として今回提示させていただいております、クリエイティブ・アドバイザーチームを立ち上げまして今回の基本計画案を本日新たにご議論いただいた数々のご意見を盛り込みながら幹事省、副幹事省のご指導を賜りましてしっかりした日本館を立ち上げていきたいと思っております。各委員の皆様には今後ともご指導賜ると思っております。何卒よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

彦坂座長

ありがとうございました。それでは最後に藤木審議官、締め言葉を。

藤木審議官

すみません。大変貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。スタートしたのが 11 月でありまして、当時スタート時点では何もなかったところがここまで来たということで、密度の濃い議論ができたと思っています。基本計画は、今日のご指摘がありました。単に文字に過ぎないというところで、今後、まさに万博という形にしないといけないということです。前回も前々回もそうですが、今後形にする段階でやっていけないといけないご指摘も多々いただいております。これから参加機関であります JETRO、総合プロデューサーの電通さんなどとお話をしながら、しっかりと基本計画に記されたものを形にしてくことをやっていきたいと思っております。これは繰り返してのお願いになりますが、こういった理想と現実刻々と離れてしまいがちであるということもご指摘の通りでございます。なるべく高い志を持ったまま 2020 年を迎えられるように引き続き皆様から色々な形でのインプット、あるいはご意見というのをお願いしたいと思っております。そういう意味では今やっとスタートラインに立てたということだと思っておりますので、ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。本当にありがとうございました。

彦坂座長

どうもありがとうございました。事務局より一点ご連絡がありますのでよろしくお願いいたします。

東企画調整官

ありがとうございます。本日のご指摘も踏まえまして計画案を修正させていただきました。先ほど座長からのお言葉もありましたが、座長にご承認いただいて最終版とさせて

いただきたいと思います。その上で、経済産業省のホームページで公開させていただこうと思います。皆さんにも座長のご了解をいただいた上でお送りさせていただきます。貴重なご意見をいただきましてどうもありがとうございました。

彦坂座長

本日もご多用のところありがとうございました。これで第3回2020年ドバイ国際博覧会日本館基本計画検討会を終了させていただきます。お疲れ様でした。

お問合せ先

商務・サービスグループ 博覧会推進室

電話：03-3501-0289

FAX：03-3501-6203